



The 8th General Conference
of EASTICA & Seminar
2007. 10. Tokyo

EASTICA第8回総会およびセミナー開催にあたって

石井米雄

アジア歴史資料センター長

大学共同利用機関法人人間文化研究機構長



皆さん、おはようございます。EASTICA 東京総会・セミナーの開催に当たりまして、一言ごあいさつを申し上げたいと思います。

私は、国立公文書館に設置されておりますアジア歴史資料センター長の石井米雄でございます。アジア歴史資料センターは、19世紀の半ばから太平洋戦争の終結までの、国の機関が所蔵しております、そして公開してきた公文書類をデジタル画像化してインターネットで公開するというまさにデジタルアーカイブでございます。既にお手元にはセンターを紹介したDVDが届いていると思いますので、ぜひお国にお帰りになりましたらごらんいただきたいと思います。英語、中国語、韓国語でも解説が入っております。

今、ご紹介がありましたように、私はセンター長を務める一方、文部科学省に設置されております大学共同利用機関法人の人間文化研究機構というところの機構長を務めております。これは訳してNIHU (National Institutes for the Humanities) といっておりますが、このNIHUでは、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、それから国立民族学博物館、もう一つは総合地球環境学研究所というので、学問的な伝統の枠を超えまして、自然環境をも視野に入れた人間文化の総合的な研究拠点を目指している機構でございます。

私が機構で力を入れておりますのは、機構を構成する今申した5つの機関が所蔵している膨大な研究資料の利用促進を図るために、これらの資料をデジタル化して、ネット上の共通のプラットフォームで利用できるようにする研究資源共有化、そういう計画を進めております。各機関が所蔵する資料には、先週、福田総理が訪問されてごらんになりまして、あるいはきのう、皆さんも午後にごらんになったと思いますけれども、国立公文書館が所蔵している漢籍にありますような東アジアの歴

史記録が大量に含まれております。

情報技術の進歩によりまして、インターネットが普及し、これまででは想像もつかなかったような歴史記録の利用方法が可能になってきております。専門分野だけではなくて、国や言葉の枠を超えて、自由に歴史記録を利用できる、そういう可能性が生まれてきております。最初にご紹介申しましたアジア歴史資料センターは、その先駆けとなる一つの機関でございます。

しかし、問題もあります。それは、東アジアの共通の記録文化である漢字をどうやって電子化するか、あるいはメタデータをどうして標準化するか、それからさまざまな言語をどうやって翻訳するかという、そういう問題、乗り越えなければいけない問題が山積しております。このことは、私は、アジア歴史資料センター、人間文化研究機構の経験から十分理解をしているつもりであります。

今回のセミナーのテーマであります「電子政府化の進展と電子記録管理」、あるいはその後開催されますシンポジウムの「デジタル化時代のアーカイブ アジアからの発信」では、私がセンター長を務めておりますアジ歴や、人間文化研究機構の事業にとっても参考になる大きな、多くの刺激的な議論がされることを心から期待いたしまして、皆様の歓迎のごあいさつとしたいと思います。ありがとうございました。